The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	銭観音の寺 ： 玄徳寺由緒
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

銭観音の寺 ――玄徳寺由緒――

柴田　芳成

一

大阪モノレールの万博記念公園駅を時計の6時の位置として、万博記念公園を真上から見る。やや扁平ではあるが、その1時と2時の間、万博公園の外周に沿って走る大阪モノレールの阪大病院前駅（12時の位置）と公園東口駅（3時の位置）のほぼ中間、竹林に囲まれた南春日丘の一番高い場所に玄徳寺（臨済宗妙心寺派）がある。門を入ってすぐの植え込みには、「白華山　玄徳禅寺」のプレートと、「銭観音…／文化六年巳…」と刻まれた石柱が見える。

本稿では、この玄徳寺の本尊である銭観音に関する説話を読んでみたい。

『観音冥応集』（以下『冥応集』と示す）の巻四第三十一話、「銭箱ヨリ観音ノ形像出現ノ事〈天満曾根崎ニアリ〉」を次に掲げる（私にA・B・Cと分けた）。

A 摂州西成郡天満曾根崎霊岑菴ノ本尊銭観音ノ来現ヲ尋ルニ、豊前ノ国中津、小笠原家ニ仕官セル沢井庄兵衛ノ尉ト云シ人ノ令子、角助トイヘル妙年ノ人、生質淳樸ニシテ常ニ深ク観音ヲ信ジ、且又父母ニ孝ヲツクシ、平素ノ

志シ厚ク実アルコトヲ、終ニ国ノ守聞シメシテ、近習ノ職ニソナヘラレ、左右ニ扈従シ、五百石ノ禄ヲ賜フ。イツノ年ニヤアリケン、江府ノ役能勤メナシ、年モ満テ国ニ帰ク。玉牟ノ道ノホド、風邪ノ病ニカヽリ、家ニ帰リテモ快カラズ、定業ノ命ハセンスベモナクテ、寛文元年十月十一日ノ夕、行年十九ニシテ卒シ、一圭宗秀ト改名ス。其母夫ニヲクレ、又一子ヲ失ヒ同ジ煙リニモ升リナント、啼焦レテ、無常ノ理ヲ悟リ、同国開善寺雪庵和尚ニ謁テ、剃髪授戒シテ、以空比丘尼ト名付テ、偏ニ菩提ノ門ニ歩ヲ運ビ、死ノ終ハ涅槃ノ定室ニ坐センコトヲノミ求メ、彼ノ別シ宗秀信士ノ為ニ、日夜普門品ヲ読誦シ、一ツノ箱ヲ仏前ニ置、看経ノ度ゴトニ銭ヲ浄水ニ洗、一巻誦ジ竟レバ一銭ヲ投入テ、積リテ後観音ノ尊像ヲ、造立センコトヲ誓テ、花ノ朝月ノ夕、更ニ怠ルコトアラズ。既ニ七年ニナリヌ。即チ開善寺雪庵和尚ヲ請ジ、供養ヲハリテ、其夜隣家ヨリ火出デ、軒ヲ並ベシ大厦、梁リヲツヾケシ重屋、一瞬ノ間ニ焼失ヌ。其翌日燼灰ノ中ニ奇シキ光明ヲ放ツ処アリ。塵ヲ払ヒテ見レバ、以空尼ノ年比集メ置レシ彼青銅、自ラ銷ケ凝結リテ、其長三寸バカリノ観音ノ尊像、岩波ノ台座ト共ニ顕レ玉フ。百福荘厳千花開発シテ、普光功徳山王如来、碧螺ノ間微妙ノ相好貴ク宝月ノ輝一切ノ毛孔皆清浄ニシテ、慈アリ威アリ。是ゾ此ノ火中ノ蓮華ナラシ国中ノ貴賤男女、奇異ノ思ヲナシ、希有殊勝ナルコトヲ、国ノ守聞玉ヒ、渇仰ノ思ヲ起シ、城中ニ請ジ入玉ヒ、沈檀一拈リ、花房一枝ヲ捧ゲ、至誠信心ノアマリニ、御厨子等ヲ荘厳彩色シテ、乍ニ寄附シ玉ヒケリ。黄檗山ノ諸禅師タチ、伝聞玉ヒテ拝稽首シテ、各讃ヲ書シテ贈リ玉フ。以空尼弥信心増進シテ、禅誦怠ラズ眼睛ヲ守ルガ如クニ、此尊像ヲ秘蔵シタテマツリ、終ニ元禄六年、八月十日ニ正念ニ円寂シヌ

B雪庵和尚ハ先ニ隠居シテ、今ノ霊岑庵ニ住シ玉フ。尼ノ師タルニ依テ遺言シテ、和尚ノ庵ニ寄附シ、諸人ノ疑ヲ解、多ノ信心ヲ起サシメ、邪見ノ輩ニ知サシメント願ヒキ。一念ノ化縁広大ナルコト、誠ニ海ヲ傾ケテモ量リガタク、山ヲコボチテモ尽シガタシ。然ニ和尚遷化ノ後、尼ノ家族霊像ヲ持シテ国ニ帰リ、我家ニ安置セント思ヒシニ、其夕ヨリ夜々家鳴光飛テ驚動ス。御闥ヲ下シテ見レバ、和尚ノ室ニ御帰リアルベキヨシナレバ、又又菴主

守リ奉リテ帰入シ玉フ。大悲ノ巨益国々ニ満、大慈ノ冥応所々ニ遍ネケレドモ、今此銭観音不思議ノ霊験、誰ノ人カ信ゼサランヤ。

C予其尊像ヲ拝スルニ実ニ今時ノ仏師ノ及ブベキニアラズ。宝座ハ蓮葉ノ舟ノ如シ。後ニ海水波ヲ揚ルノ形アリテ、尚又銭ノ文モ残レリ。彼ノ弘誓甚深ノ海ヨリ出デ、、苦海常没ノ衆生ヲ済度シ玉フ慓相、誠ニ貴イカナ愚シイカナ。[1]

『冥応集』は、真言僧の蓮体が観音の霊験譚を集成した作品（「日本古今ノ霊応ヲ集メテ大成セント欲ス」、「和国ニハ殊ニ霊験多シトイヘドモ、古人筆記スル事ナキガ故ニ、伝ル事希ナリ。予常ニ此ヲ歎クガ故ニ、今固陋ヲ忘テ集録スルモノナリ」（巻一第一話））であり、宝永二、三年（一七〇五、六）に刊行された。右の説話に語られる寛文七年（一六六七）の銭観音火中出現から四十年ほど後であって、文中には「予其尊像ヲ拝スルニ」と蓮体が実見したことも述べられている。まず、説話内容を確認しておく。

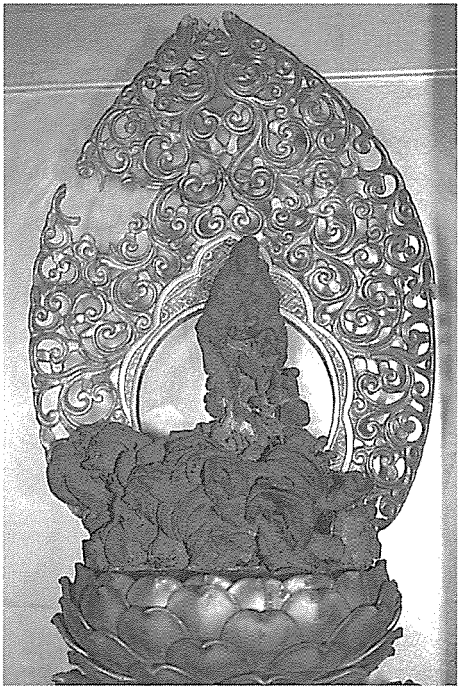
Aでは、曾根崎霊岑庵の銭観音の出現由来が語られる。豊前国中津藩小笠原家に仕える沢井庄兵衛ノ尉の子角助が十九歳で亡くなり、その母は開善寺の雪庵和尚について出家受戒して以空尼と名乗る。日夜普門品を誦し、観音像造立のために浄銭を貯めていたが、角助の七回忌の折、隣家の火災により類焼した。その焼け跡で見つかった銭箱の中から観音像が出現する。国中の人々の尊崇を集めるところとなり、国守から御厨子を賜り、黄檗僧からも讃が贈られた。以空尼は没するまでその像を大切にしたという。この像を現在に伝える玄徳寺のご住職のお話しでは、お顔部分は整えるために手が加えられているとのことだが、その姿は説話に語られている通り、風に煽られる波の上に立っているようにも見え、波が洗う岩座の所々には、確かに銭文の形が残っていることも確認できる（【参考資料1】）。

ここでの出現の様相は、溶けて固まった銅銭に観音の尊像を見出した、いわば「見立て」とも言えるものである。新間水緒氏は『観音新験録』所収の観音霊験譚を分析する中で、近世の、こうした霊験仏の出現のありさまについて、

「近世の観音菩薩は、下女や獣の姿に化身して人々の前に現われるのではなく、霊芝や夕顔の種形となって顕現したり、あるいは釣上げられたり、井底から発見されたりするのである。これも近世人の現実感覚の一端を示すものではないだろうか」と指摘されている。[2]この銭観音の姿はまさにその例に数えられるものといえるだろう。もっとも、その背景には、近世の社会がもっていた文化に対する態度に加えて、何よりも観音出現の顛末を見聞きした人々の、子を思う以空尼の気持ちへの共感があったであろう。

Bは、以空尼の死後のいきさつが述べられる。以空尼の師であったことから、銭観音は、すでに中津を離れて大坂曾根崎の霊岑庵に隠居していた雪庵和尚の元に渡る。和尚の没後、一時は以空尼の家族が豊前国に持ち帰ったが、不思議が生じたために、和尚の庵に戻されることとなったという。

Cでは、その観音像を実際に目にした筆者蓮体の感想が記される。以空尼の没年が元禄六年（一六九三）であり、『冥応集』の刊行が宝永三年（一七〇六）であるから、蓮体はその十年ほどの間に見たことになる。



【参考資料１】

二

さて、右の説話に登場する人物についてみると、銭観音出現のきっかけとなった沢井家の人々、沢井庄兵衛ノ尉、その息子角助、および以空尼に関して、詳細なことはわからない。ただ、以空尼については、いくつかの情報を加えることができる。『摂津名所図会大成』（以下『大成』と表記する）「銅銭観音堂」の項を次に掲げる。

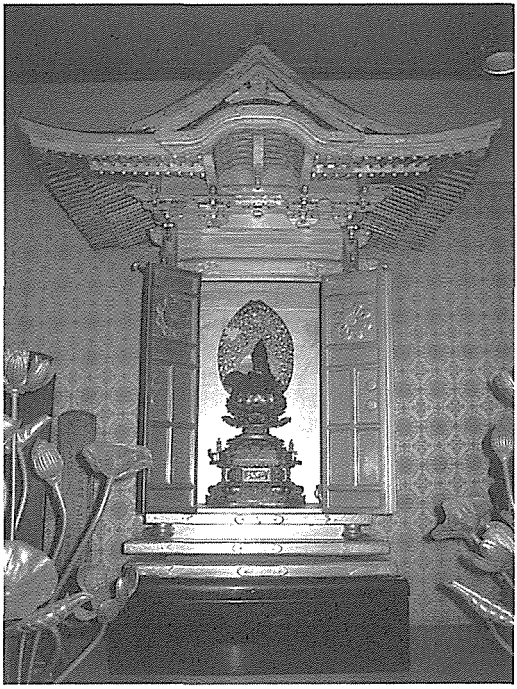
銅銭観音堂〈生玉門前の南、玄徳寺にあり、霊験いちじるしとて詣人平生に間断なし〉

当尊銅銭観音の来由を尋ねるに、往昔、寛文の年間、九州豊前国中津侯の家臣に澤井庄兵衛といへる有。没後、一子角助、若年ながら家督を嗣て禄五百石を賜ふ。然るに年を重ねず、十九歳にて身没ぬ。母の歎きたとへんにものなし。夫庄兵衛没して後、又もや頼み力とせし一子に別れし愁傷嘸かしと想像れて哀れなり。斯て母親は悲しみの余り、菩提所開善寺に詣で、住職雪庵和尚を師として剃髪受戒し、以空比丘尼と号し、夫と一子の為に一心不乱に普門品を読誦し、花の朝月の夕も更に怠ることなく、一の篋を仏前にそなへ、普門品一遍を読終れば一銭を水にて洗ひ、此箱に入をき、積れる銭を以て観音の尊像を建立せんことを誓り。斯のごとくする事既に七年に及ひ、寛文七年十月十一日は亡子の七回忌に当りぬれば、懇に法事を営み終りしか、其夜はからず隣家より火起りて、以空尼の宅も共に類焼す。以空は翌日おどろき乍ら灰を払ひて、年月積たる彼銭の有所を尋ぬるに、悉々く焼蕩けて一塊となれり。頓て浄水にて洗ひ是を見れば、銭の形累々とかさなり、船座となり、蕩流れしはすなわち御長三寸許の補陀落観世音の霊像と現れ給ふ。実や是、以空比丘尼信心の感ずる所にして、尊容自然と出現せしぞ難有き。邦君にも聞及ばせ給ひ、御拝覧の上、御厨子を寄附し給ふ。斯有し程に、黄檗木菴禅師、高泉和尚等、其伝記を書送られ、世々の證とせられける。爾後、元禄六年癸酉八月、以空比丘尼七十七歳にて逝去す。以空の師雪庵和尚、其頃は摂州天満郷霊岑庵に住居せらるゝに依て、以空没後、右の霊像を霊岑庵に迎へて安置

す〈此旧地、北の神明門前すじを俗に銭観堂と字す。是銭観音の訛にして此辺り霊岑庵の古趾なるべし〉元禄壬午年、雪庵の弟子某当寺に住職せられしにより、此霊像も共に当寺に安置し奉り、今に至つて恭敬し奉る所なり。委き事は黄檗木庵和尚、同高泉和尚、同月潭和尚、前妙心雪庵和尚、又一時軒等の縁起あれば、爰に其略を誌す而已と寺記の略に見へたり。（〈　〉は割書を示す、句読点を付すなど表記は私に改めたところがある）[3]

『冥応集』と同内容の説話が語られる中で「元禄六年癸酉八月以空尼七十七歳にて逝去す」とある。『冥応集』にあった没年とも一致しており、この記述を信用して逆算すると、以空尼は元和三年の誕生となる。また、『冥応集』に先行する銭観音に関する資料として、『観音新験録』（月潭編、元禄九年（一六九六）刊）があるが、その第十三話「青銅ノ化現」[4]の冒頭に「尼以空ハ乃チ渋田見氏ナリ。其ノ先ハ出ツ二於信ノ仁科氏ニ」。適二中津ノ沢井氏ニ」との記述があり、その出自は渋田見氏であったことがわかる。信濃の仁科氏に遡る渋田見氏は小笠原家の重臣であり、小倉藩では家老を務める家でもあった[5]。

角助、またその父沢井庄兵衛ノ尉が仕えた中津藩の小笠原家は、寛永九年十月、豊前国・豊後国国東郡を領じていた細川氏が肥後に移封されたことにともない、その旧領地に配さ



【参考資料２】

れた小笠原氏四家の一つで、在任期間から判断すると、兵衛ノ尉・角助が仕えた藩主は初代の長次（寛永九年十月～寛文六年五月）、銭観音の評判を聞いて御厨子（【参考資料2】）を賜ったのは二代の長勝（寛文六年八月～天和二年十二月）と推定される。[6]

また、銭観音に対して讃を送った黄檗僧について、『冥応集』はその名を記さないが、『大成』によれば、「其伝記を書送」った僧として、「黄檗木菴禅師、高泉和尚等」の名が見られる。木庵禅師のものは確認できていないが、高泉和尚のものは玄徳寺発行の冊子（後述）に記載されている。

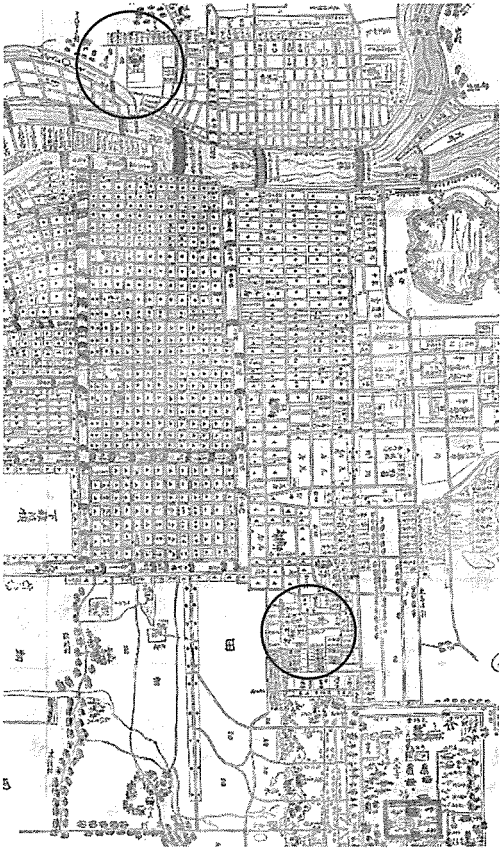
以空尼の師である雪庵についても情報は少ない。『大成』に「前妙心雪庵和尚」とあることから、臨済宗妙心寺派に属したものと思われる。『昭和改訂正法山妙心禅寺宗派図』によって確認すると、「雪庵」を名乗る僧は複数いるが、時期から推して、「雪庵宗延（または慈延）」（慶安四年三月十六日前堂職を稟ける）が該当するかと思われるものの、それ以上に詳しいことはわからない。

次に、説話中の寺院名に注目してみよう。『冥応集』本文冒頭、「摂州西成郡天満曾根崎霊岑菴」は、雪庵和尚の居所であり、銭観音の安置された場所であったが、現存しない。正確な旧所在地は不明であるが、『大成』の記事によっておおよその位置は見当がつく。

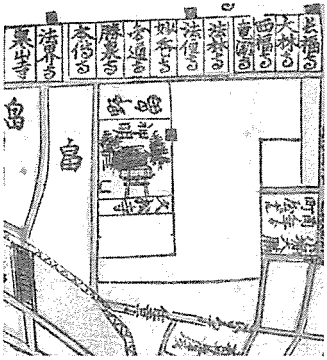
霊岑庵に安置す〈此旧地北の神明門前すじを俗に銭観堂と字す。是銭観音の訛にして此辺り霊岑庵の古趾なるべし〉（『大成』「銅銭観音堂」項）

同神明の門前南北の通りをいふ。今誤りて銭観堂といふ。元禄中、雪庵和尚この辺りに住し、霊岑菴と号し銅銭観音の霊像を安置せられしにより、世俗これを銭観音堂と称し、其通りを銭観音堂すじと言ひしが、後に生玉の南玄とく寺に此尊像を迁してより、只その名のみ存りしを、終にあやまつて銭ぐわん堂とはいひならわせり。右観世音の由来は玄徳寺の條下に委しく出せば、こゝに略す（『大成』「銭観音條」項）

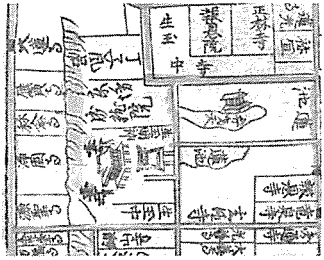
【参考資料３】



【参考資料３Ａ】



【参考資料３Ｂ】



以空尼の没年（元禄六年）に近い、元禄四年の『新撰増補大坂大絵図』（【参考資料3・3A】（上が北））には、曾根崎の地にあった神明社の社前を南北にはしる通りが見える。『大成』の記述から、霊岑庵はこの通りに沿った場所にあったものと想定される（現在、神明社は露天神社内に末社として祀られており、旧境内地には碑が残るだけである）。

『大成』では、「銭観音條」項に「後に生玉の南玄とく寺に此尊像を迁して」とあり、「銅銭観音堂」項でも項目名に続けて割書で「生玉門前の南、玄徳寺にあり、霊験いちじるしとて詣人平生に間断なし」とある。幕末には玄徳寺の銭観音として信仰を集めていたことが記され、実際に現在地に移った今も、銭観音は玄徳寺の本尊として祀られている。では、銭観音が玄徳寺に入ったのは、いつごろのことであろうか。

『大成』「銅銭観音堂」項の本文中に、「元禄壬午年、雪庵の弟子某当寺に住職せられしにより、此霊像も共に当寺に安置し奉り、今に至つて恭敬し奉る所なり」とある。この記述と、寺伝にいう「元禄十五年の頃、この雪庵老僧の弟子大随和尚が当玄徳寺に住職せらるるに際し、この観音大士の霊像と以空禅尼の位牌とが当寺に安置せられることになったのであります」[7]とを照らし合わせると、「元禄壬午年」とは元禄一五年であって一致し、「雪庵の弟子某」とは、玄徳寺の初代住職である大随和尚と考えられるだろう。しかし、不審の残る点もある。右に引いた寺伝は「雪庵老僧が八十才の時に記録された銅銭観音大士記に依るもの」とされる。つまり、雪庵の存命中に銭観音が玄徳寺に移ったということになる。一方、さきに見た通り、『冥応集』には雪庵没後、以空尼の家族が中津に持ち帰ったものを「庵主」（霊岑庵か）が再び迎え入れたことを記すものの、玄徳寺に移ったことについてはふれない。このように、銭観音が霊岑庵から玄徳寺へ移った時期と、雪庵の没した時期との前後関係に不分明な点があり、正確な時期は断じがたいものの、ここでは元禄一五年の前後に玄徳寺に入ったものと考えておく。[8]

その玄徳寺であるが、【参考資料3B】をみると、生玉社門前の蓮池に接するように、広大な寺域をもって描かれている（現在では、蓮池のあった場所は生玉公園となっており、玄徳寺の旧地は宅地などになっている）。『昭和改訂正法山妙心禅寺宗派図』に収載された「昭和四十八年法系調査回答」によると、「「備考」往昔、黄檗宗ニシテ寛文

十二年ノ創建ナリ。鉄眼和尚貞享元年ニ開山大随和尚ニ委嘱シ妙心寺派トナル」[9]とある。生玉社周辺の寺町群は、天正一一年（一五八三）に始まる豊臣秀吉の大坂城築城にともなう都市計画の一環として形成されはじめ、大坂夏の陣（一六一五）を経て整備される。寛文一二年（一六七二）の創建というのは、やや遅れて同地に入ったということになろうか。

玄徳寺が現在の茨木市南春日丘の地に移ったのは、昭和四八年（一九七三）であり、旧地の生玉社の周辺が歓楽街化してゆくのを避けてのことという。

右にみてきた銭観音に関する事項を簡潔にまとめると次のようになる。

	事項	銭観音所在地
元和三年（1617）	以空尼誕生	
？	夫・沢井庄兵衛没	
寛文元年（1661）	息子・角助（19歳）没	
寛文七年（1667）	角助七回忌、銭観音出現	中津（豊前国）
寛文一二年（1672）	玄徳寺創建（黄檗宗）	
元禄六年（1693）	以空尼没（77歳）	中津→霊岑庵（摂津国・曾根崎）
？	雪庵没（？）	（霊岑庵→中津→霊岑庵）？
元禄一五年（1702）	玄徳寺に大随和尚（臨済宗）	霊岑庵→玄徳寺（摂津国・生玉門前）
昭和四八年（1973）	玄徳寺移転	玄徳寺（生玉門前（大阪市天王寺区）→大阪府茨木市）

三

ここまでに挙げた資料を含め、現在確認できている資料を整理したおきたい。

まず、諸資料をまとまった形で収載したものとして、玄徳寺発行の冊子がある。この冊子は昭和四八年に現在地に移った際に発行されたもので、雪庵「銅銭観音大士記」に基づく縁起、雪庵和尚の賛、高泉和尚の賛、法雲禅師「化現銭観音大士縁起書」の序文などが収められ、貴重な資料集となっている。これらのうち、雪庵と高泉による賛は銭観音出現に対して寄せられたものであり、法雲禅師も当時、小倉福聚寺住職であり、いずれも出現からさほど隔たらない、銭観音が中津にあった頃の作と判断される。

続く資料は年次順に、月譚『観音新験録』（元禄九年）、岡西惟中『霊岑庵銭観音縁起』[10]（元禄十四年）、蓮体『観音冥応集』（宝永三年）となる。この三点は、元禄六年の以空尼の没後、つまり、銭観音が大坂の雪庵の元に届けられた後の成立である。次にまとまって見られるのは、幕末期の資料となる。すなわち、『摂陽奇観』[11]（天保四年（一八三三））、『摂津名所図会大成』（安政年間（一八五四-五九））、『日本諸国観音霊場集』[12]である。

『冥応集』から『摂陽奇観』まで約百二十年、その間には、大坂の地誌の代表ともいえる『摂津名所図会』が出版されている（寛政八-十年（一七九六-九八））が、その中に銭観音の記事は見えない。では、その百二十年ほどの間、銭観音は忘れられていたのであろうか。そうではなく、『大成』に「平生詣人間断なし」とある通り、そのご利益を求めて参詣する人は途絶えることはなかったのであろう。特別に取り上げられることもない、しかし、忘れ去られたものでもないという状況。このことは銭観音が一種のブームとしての時期が過ぎたあと、その地に根付いた観音さんとして親しまれたことを示すと見ることができるのではないだろうか。流行神（仏も含め）の熱狂的なブームの期間は長く続くものではなく、時間の経過の中で忘れられていくこともあれば、落ち着いた信仰に移る場合もある。[13]

【参考資料4】は、檀家から玄徳寺に持ちこまれたという刷り物（四二・六×一八・二㎝）である。

制作時期は不明であるが、画面に大きく銭観音の姿が描かれ、その上段には由来とご利益が記される。檀家、参詣者への頒布を目的としたものと判断され、銭観音が信仰を集め、それに応える活動も行われていたことの証拠の一つとなるだろう。また、時代がさらに下る文献であるが、「浪華に関する事項を巨細となく書きつらねており、あたかも浪華百科事典の感がある」[14]と評される『浪華百事談』（明治二五～二八年成立）には、「銭観音」の項目が立てられ、次のように記される。

源正寺の上の地の東北角なる、何寺とかいへる寺院内の小堂に、銭観音を安置す。是は銅銭の火にあひて固結、其後ち観音の像に似たるを以て、かく称して崇めるものなり。是は此のみ成らず諸方にあるものにて、珍しといふ程には非ず。天満に銭観音のそばやといへるもの古くありて、其家にもまつれり。

【参考資料４】

右の文章では寺院名が記されないなど、いくらか批判的な見方を含んでいるように感じられないでもないが、「此のみ成らず諸方にあるもの」、また蕎麦屋という客商売の店にもあるなどという点からは、銭観音の存在が広く知られ、それにあやかる風潮というものも想像できるのではないだろうか。

いまの玄徳寺は観光寺院ではなく、「銭観音」と聞いても思い当たる人は少ないであろう。それでも、大阪の地誌や歴史に関わる書籍には、しばしば取り上げられている。[15]その出現から三百五十年近い時間を経て、ネオンの街から離れた千里の静かな丘の上、「平生に間断なし」とはよほど様子の違う景色の中で、銭観音はいまも秘仏として大切に守られ、祀られている。

注

（1）本文の引用は『宝永版本 観音冥応集』（和泉書院、二〇〇六年）により、私に表記を改めたところがある。なお、『冥応集』はここに掲げた説話に続けて中国の先例を挙げる。

○昔シ宋朝ノ淳熙元年ニ、呉江ノ長橋ノ側ニ鄭氏ノ媼アリ。年八十余ナリ。最モ貧ニシテ、茅ヲ締デ家トシ、日ニ市ニ出デ、食ヲ乞テ命ヲ拄ヘタリ。人皆此ヲ憐ミケル。弊レタル物ヲ身ニ纏ヒ、糊キ物ヲ食シテ、サテ少モ乞得テ余リタル銭ヲ、餅ノ中ニ蔵メ畜ヘ置タリ。此ハ観音ノ像ヲ画ントノ志ナリ。其年ノ夏四月ニ、隣ヨリ焼亡起リテ、彼ノ媼ガ室モ焼失タリ。明日媼啼泣シテ、彼ノ室ノ焼タル灰ヲカキノケテ、銭ヲ入タル餅ヲ取出シタリケレバ、少シモ損ゼネバ悦ビ、サテ中ノ銭ヲ見レバ、皆ナ鎔ケテ観音ノ尊像ト成玉ヒ、其御長一尺可ヲハシマス。サテ衣冠瓔珞、楊柳浄瓶、其ノ相ノ勝レタルコト、言ニ述ガタシ。仏師冶工ナド群リ集ツテ、此ヲ拝シテ曰ク、此ノ尊像ノ貴ク勝レ玉フ体、我等ゴトキノ凡人ノ力ニ及ビタルコトニアラズトテ手ヲ拍テ愕キ讃歎シ奉リヌ。富貴高官ナル人アリ。一室ヲ営ミ作リテ彼尊像ヲ安置シ、鄭氏ノ媼ヲシテ香華ヲ供養サセシメ玉ヒキ。媼ノ寿命百余歳マテ、恙無リキトイヘリ。古今時殊ニ、和漢人異ナリトイヘドモ、大士ノ霊応同ジキ者ナリ。

老女の貯めていた銭が火災による熱で溶け、それが観音の形に固まったという内容であり、こちらの出典は『夷堅志』（直接には『夷堅志和解』）に求められる。『冥応集』は、「今此冥応集ニハ、天竺真丹ノ事ヲバ載ズ」（巻一第一話）という方針を掲げるが、実際には中国の話題も散見する。いまの場合も、最後の一文「古今時殊ニ、和漢人異ナリトイヘドモ、大士ノ霊応同ジキ者ナリ」との感動から導かれたものといえるだろう。

（2）『観音新験録』について―大谷大学図書館蔵本の紹介をかねて―」（『文藝論叢』七二号、二〇〇九年）。

（3）『摂津名所図会大成』巻四（『浪速叢書』第七、名著出版、一九七八年）

（4）『観音新験録』（山崎淳「地蔵寺蔵『観音新験録』―翻刻と解題」、『上方文芸研究』6号、二〇〇九年）により、次に掲げる。なお『大成』の末尾にいう月潭和尚の著作とは、本書を指すかと思われる。

第13話　青銅ノ化現

尼以空ハ乃チ渋田見氏ナリ。其ノ先ハ出ツ二於信之仁科氏ニ一。適ク二中津ノ沢井氏ニ一。沢井早没シテ、又喪ス二一子ヲ一。従レ是発心薙髪シテ、潜ム二跡ヲ一舎ニ一。常ニ奉シテ二大士ニ一、誦持ス二普門品ヲ一。置イテ二一篋ヲ于大士ノ

前ニ一、毎ニレ誦スルニ一品ヲ一、則投スニ一文銭ヲ一。銭既ニ盈レハ則チ傾ケ出シテ、以テ備ナフニ香燭ニ一。以テ二誦持不ルヲ一レ懈ラ、銭恒ニ盈ツレ篋ニ。寛文丁未、冬十月一夕、隣家失火、延燎スニ其舎ヲ一。明日家人、撥ツテニ塵土ヲ一、得ニ銭篋ヲ一。篋既ニ成ルレ灰ト。其中有リ下隠然トシテ、類セルニ梵形ニ一者上。掬シテレ水ヲ澡濯スレハ、乃チ為ニ童真大士之像一。高ケ可ニ三寸一、下ニ踏ムニ宝座ヲ一。如シニ蓮葉ノ舟一。後ニ有リニ海水、揚ルレ波之形一。而ルニ銭文尚存セリ。殊相厳麗、宛モ如シニ鐫工ノ、極メテ巧妙ナルカ一。空大ニ驚喜シテ、至ルニ於感泣之不ルニレ遑アラ。於レ是ニ新ニ装ツテニ宝龕ヲ一、以安スレ之ヲ。敬礼供養不ニ敢テ少クモ離レ一、合邑拝瞻シテ、而起スレ信ヲ者、甚多シ

（小字の送りがなを本文と同大にするなど、表記は私に改めたところがある）

（5）『観音新験録』の第十四話「水火無レ毀」は、小倉藩小笠原氏に仕えた渋田見盛治に関する話柄であり、その内容は次の通りである。寛文元年（一六六一）、少年であった盛治は井戸の底から一寸三分の観音像を得、大切に護持していた。同十年（一六七〇）に隣家の失火により類焼したものの、観音像は少しも損ずることがなかった。『観音新験録』による限り、寛文元年には盛治は七、八歳だったようであり（「年在齠齔」）、同年には四十四歳と見込まれる以空尼とは、三十数年、つまり一世代ほどの年齢差となる。渋田見氏の系図類で、以空尼と盛治の関係を確認することはできていないが、両者に血縁関係があったと仮定することができるとすると、よほど観音との縁の深い家系であったということになる。なお、『冥応集』の直前話（巻四第二十九話「井ヲ浚テ聖像ヲ得、並ニ画像火ニ焼ザル事」）も同内容の説話であるが、盛治については、「渋田見盛治居士ト云人アリ」と紹介されるだけである。渋田見盛治については、『三百藩家臣人名事典』7（新人物往来社、一九八九年）を参照。

（6）『藩史大事典』第七巻九州編（雄山閣、二〇〇二年）などを参照。

（7）玄徳寺発行の冊子による。

（8）この時期の問題として、曾根崎という場所と観音との関わりで一点付け加えておきたい（信多純一「近世芸能に見る巡礼」『道と巡礼』（和泉書院、一九九三年）参照）。元禄十六年（一七〇三）、近松門左衛門は、神明社にも近い曾根崎天神の森で起こった心中事件をもとに『曾根崎心中』を発表する。現在では「生玉社前の段」から上演されることが多いが、本来はその前に「観音めぐり」が置かれている。遊女お初が大坂三十三観音を巡礼する趣向であり、「一番に天満の太融寺……白む夜明けの鳥も二番に長福寺……照す鏡の神明宮拝み廻りて法住寺」と続き、「爰も稲荷の神社、仏神水波のしる

しとて、甍ならべし新御霊」まで、三十三の寺社の名が連ねられる。元禄十六年は、銭観音が玄徳寺に移った時期と相前後する。「観音めぐり」のくだりには、玄徳寺、あるいは霊岑庵は入っていないが、この地域において観音への関心が高まった時期と言えるだろう。

（9）『昭和改訂正法山妙心禅寺宗派図』所載の「寺籍調査表」（大正六年）にも同様の内容を記す。現在は臨済宗であるが、もと黄檗宗の寺として創建されたということは、銭観音の出現当時、黄檗僧から賛が贈られたということにも関連するであろう。

（10）一時軒岡西惟中の作は玄徳寺冊子にも概略が収められている。そのほか、国文学研究資料館マイクロ資料に三点の所在が知られる。

（11）「北埜銭観音」の項に記される。ただし、前半は源頼朝への復讐を図る梶原景清が、両目をくり抜いて頼朝と対面、日向国に流されたのを、恋人の阿古屋が下向して再会するという内容であり、後半に、阿古屋の従弟造酒之介が景清念持仏を管理し、毎日尊前に一銭ずつ捧げていたが、あるとき隣家より出火、念持仏は助け出して今に洛陽清水寺の景清観音と拝まれており、灰燼の中から見つかった銭は観音姿となって今に「大坂北埜神明近辺に銭観音と拝れ給ふ」と語られる。前半は景清伝承に則ったものであり、後半は、難波寺の景清爪形観音の伝承とも混線しているような話となっている。『浪速叢書』所収の『摂陽奇観』では、同項の末に「生玉　玄徳寺／銭観音あり（原本コノ所ニ貼紙アリ）」との注記がなされている。

（12）国文学研究資料館マイクロ資料による。成立年次は不明だが資料の様相から、江戸末期ごろの作品と判断した。内容は、日本各地の著名な観音について紹介するものである。ただし、銭観音については、「摂州西成郡天満曽根崎霊岑庵の本尊を銭観音と云は」と始まっており、『冥応集』などの先行作品によって作成されたものと思われる。

（13）宮田登『江戸のはやり神』（ちくま学芸文庫、一九九三年）、鈴木岩弓「「流行神」の誕生と霊験譚―横樋観音の場合―」（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』二六、一九九二年一二月）、吉田正高「近世江戸における流行神と伝説」（『国文学解釈と鑑賞』二〇〇五年一〇月）などを参照。

（14）日本随筆大成（第三期2、吉川弘文館、一九七六年）

（15）木谷蓬吟「大阪を歩く」（『随筆大阪』所収、一九四三年・錦城出版社）、長谷川幸延『大阪今昔』（一九四六年・青朗社）、

『難波大阪　郷土と史蹟』（一九七五年・講談社）、『大阪春秋』創刊号（一九七三・一一月）、三十五号（一九八三・三月）、三善貞司編著『大阪史蹟辞典』（一九八六年・清文堂）、三善貞司編著『大阪伝承地誌集成』（二〇〇八年・清文堂）など。

【参考資料1】は玄徳寺提供、【参考資料2、4】は稿者撮影

【参考資料3（A、Bとも）】国際日本文化研究センター・データベース「所蔵地図データベース」の「新撰増補堂社仏閣絵入諸大名御屋敷新校正大坂大絵図」（http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_1184.html）による。

〔付記〕

本稿を作成するにあたり、玄徳寺住職本多智昭和尚、梅松院副住職本多道隆和尚のご高配を賜りました。また、玄徳寺の先代住職寺庭婦人正子様には戦後から現在に至る玄徳寺、銭観音に関する貴重なお話しをうかがう機会を賜りました。深謝申し上げます。

なお、本稿は神戸説話研究会における研究報告に基づいています。研究会の席上、考察を進めるにあたって有益なご意見をくださいましたみなさまに感謝申し上げます。

The temple of Zeni-kannon

Yoshinari SHIBATA

The statue of kannon at Gentokuji temple(Ibaraki, Osaka) is called 'Zeni-kannon'. The statue has a wonder story about its appearance. At 1661, Sawai Kakusuke died at the age of 19. His mother felt sad, and became a num. She saved coins to build the statue of kannon for Kakusuke. At 1667, One day the next house was burned and her house was also burned. The next day, she found the shining thing at the place of her house. It is the statue of kannon. The coins which she saved melted and overlapped by fire, and became the shape of kannon, the size of it is about 10 cm.

In this paper, I considered the circumstances of the movement of Zeni-kannon from Nakatsu at Kyusyu, to Reisinan at Sonezaki Osaka, and to Gentokuji temple.